

問1 人間は不完全な存在であり、世界の出来事は必ずしも自分の意のままにはならない。しかし、そうした悪い出来事をも自分と切り離さずに自らの問題として受け止め、より良くあり得た自己を模索し続けようとする主体的態度が存在する。単なる自己否定にとどまらず、世界の中で自己のあり方を決める前向きな試みとして倫理的意義が見出される、この感情や態度を何というか。（2024年 全国公立入試 類似）

1. 昇華 2. 葛藤 3. 後悔 4. 抑圧

問2 青年期の発達過程において、独自の価値観や人生観を模索し、精神的な自立を遂げるために、親や年長者、あるいは既存の社会的権威に対して反発や否定的な態度を示す時期を何というか。（2025年 全国公立入試 類似）

1. 第二反抗期 2. 自我同一性 3. 心理的離乳 4. 自己同一性

問3 自我が欲求不満や葛藤による不安に直面した際、無意識のうちにその不安を和らげ、自己の崩壊を防ごうとする心の適応の働きを総称して何というか。（2005年 全国公立入試 類似）

1. 回避行動 2. 防衛機制 3. 攻撃行動 4. 逃避行動

問4 1980年代のアメリカにおいて、人工授精による代理出産で生まれた子供の親権をめくり、生みの親である代理母と、遺伝子上の父親である依頼者夫婦との間で争われた裁判で、州最高裁判所が代理出産契約を無効と判断した、生命倫理や家族の定義をめぐる議論に大きな影響を与えた出来事を何というか。（2025年 全国公立入試 類似）

1. スキアボ事件 2. ベビーM事件 3. クルザン事件 4. クインラン事件

問5 ドイツの哲学者・心理学者が提唱した性格類型において、他者への愛や奉仕、社会的な貢献を最も重要な価値として追求するタイプは、6つのタイプのうち何型と呼ばれるか。（2025年 全国公立入試 類似）

1. 経済型 2. 社会型 3. 理論型 4. 審美型

問6 フランスの思想家が著書『エミール』の中で、「私たちは、いわば二度生まれる。一度は生存するために、二度目は生活するために。一度は人類として、二度目は性をもった存在として」と述べた。この、青年期において心理的に親から離れて自我に目覚め、精神的に新しく生まれ変わる変化を指す概念は何か。（2018年 全国公立入試 類似）

1. 自我の発見 2. 自我の確立 3. 心理的離乳 4. 第二の誕生

問7 青年期において、それまで依存していた親などの保護者から離れ、一人の人間として精神的自立や家族からの独立を志向するようになる心理的プロセスを何というか。アメリカの心理学者ホリングワースが提唱した概念である。（2008年 全国公立入試 類似）

1. 心理的離乳 2. 自我同一性 3. 第二反抗期 4. 自己肯定感

問8 他者の行動を評価する際、その人が置かれた状況や環境に原因があるとは考えず、その人の性格や能力など、自身に原因があるとして帰属させてしまう認知の偏りを何というか。（2025年 全国公立入試 類似）

1. 敵意帰属バイアス 2. 自己奉仕バイアス 3. 基本的帰属の誤り 4. 偽の合意効果

問9 青年期における自己形成のプロセスを分析し、自分が時間や場所を超えて一貫した同一の存在であるという感覚が他者に承認されることで得られる「アイデンティティ（自己同一性）」の概念を提唱した、アメリカの心理学者は誰か。（2024年 全国公立入試 類似）

1. レヴィン 2. オルポート 3. ハヴィガースト 4. エリクソン

問10 ドイツ出身の医師・神学者であるシュヴアイツァーが提唱した、自己の存在を維持しようとする意志と同様に、他者や他の生物も「生きようとするもの」であると考え、あらゆる存在に対して愛と尊敬を抱き、それを尊ぶことを人間の根源的な責任とする倫理思想を何というか。（2026年 全国公立入試 類似）

1. 自然の権利 2. 人間中心主義 3. 責任の原理 4. 生命への畏敬

## 答え合わせ・解説 No.6

問1	答え 3 後悔	過去の選択や出来事に対する単なる自己否定や無力感への逃避ではなく、自らの不完全さを認めつつも、世界で起きた出来事を自分事として引き受け、より良い自己のあり方を主体的に模索し続けようとする前向きな倫理的態度として捉えられる。
問2	答え 1 第二反抗期	青年期には、他者への依存から脱却し、自己の主体性を確立するプロセスとして、親や年長者、社会的権威に反抗する時期が見られる。これは幼児期の第一反抗期に対して、精神的な自立を目指す重要な発達段階として位置づけられている。
問3	答え 2 防衛機制	自我が脅かされるような欲求不満や葛藤に直面した際、無意識のうちに不安を和らげ、自己の統合を維持しようとする心の働きを防衛機制という。精神分析の創始者であるフロイトによって見出され、その娘アンナ・フロイトらによって体系化された。これには抑圧、合理化、投影、昇華など様々な種類が存在する。
問4	答え 2 ベビーM事件	1980年代にアメリカで発生したこの裁判では、代理出産契約の有効性と子供の親権が争われた。ニュージャージー州最高裁判所は、金銭が絡む代理出産契約は公序良俗に反するとして無効と判断し、親権は依頼者側に認めたものの、代理母にも面会権を認めた。この判決は、生殖補助医療の進歩に伴う倫理的・法的な課題を世界に広く提起する契機となった。
問5	答え 2 社会型	シュブランガーは価値の志向性に基づいて性格を6つに分類した。そのうち、他者への同情や愛、社会への奉仕を重んじるタイプは「社会型」と呼ばれる。なお、真理の探究を重んじるのは「理論型」、実用性や経済的利益を重んじるのは「経済型」、美的な調和や表現を重んじるのは「審美型」、権力や支配を重んじるのは「権力型」、神や絶対者への帰依を重んじるのは「宗教型」である。
問6	答え 4 第二の誕生	著書『Eメール』において、青年期における自我の目覚めや精神的な変化を「私たちは、いわば二度生まれる」と表現し、これを「第二の誕生」と名づけたのはフランスの思想家ルソーである。青年期における身体的な変化を指す「第二次性徴」や、レヴィンが提唱した「マージナルマン（境界人）」、親や社会に反抗する「第二反抗期」などと区別する必要がある。
問7	答え 1 心理的離乳	青年期には、親の保護や支配から脱して精神的自立を求め、家族からの独立を図るようになる。この心理的プロセスを、ホリングワースは乳児の離乳になぞらえて「心理的離乳」と呼んだ。この時期の青年は、親への反抗や葛藤を経験しながらも、自己の主体性を確立していく。
問8	答え 3 基本的帰属の誤り	他者の行動の原因を説明する際、周囲の状況や環境といった外的な要因を過小評価し、その人の性格や態度といった内的な要因を過大評価してしまう現象を指す。例えば、他者が約束の時間に遅れた理由について、電車の遅延という環境的な要因を考慮せず、「本人のだらしなさ」という内的な要因に原因を求めることがこれに該当する。
問9	答え 4 エリクソン	アイデンティティ（自己同一性）の概念を提唱したアメリカの心理学者。彼は人生を8つの発達段階に分け、それぞれの段階における心理社会的危機を乗り越えることで人格が形成されると考え、青年期の主要な課題をアイデンティティの確立とした。
問10	答え 4 生命への畏敬	シュヴァイツァーは、自己の生命を維持しようとする意志と同様に、他者や他の生物も「生きようとする生命」を持っていると考えた。このすべての生命に対して愛と尊敬を抱き、それを尊ぶことを「生命への畏敬」と呼び、人間の根源的な責任であると主張した。